
まさよしとSOLA 食あたりになったのは、僕のせいじゃない

大蚊里伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まさよしとSOLA 食あたりになつたのは、僕のせいじゃない

【Zコード】

Z8917U

【作者名】

大蚊里伊織

【あらすじ】

銃を始めとする武器と、科学と並行して裏で進行していた鍊金術と魔法が公に使われるようになった世界。魔力の根源と言われる深い森の調査委員で、たまにほかの仕事をするまさよしは、一緒に暮らす仲間とともにのんびりとした生活を送っていたが、ある日、少年一人に仕事をもちかけられ、大きな事件に巻き込まれることになる。鍊金術と魔法と科学の交差する世界で、話はてんかいする。無事日常にもどれることができるのか？

(前書き)

闘いの場面などがあり、R15にしてあります。

細かな魔方陣が床に書かれていた。静かな部屋だ。衣を着た男たちが静かに行き交っている。あるものは何か呪文をとなえ、あるものは魔方陣をさらに描いていく。

円陣の周りに数体の眷属獣がいて交代しながらそれを守っている。魔法政令都市ユータム。それは五つの「円陣の魔方陣」に守られた不夜の都市だった。

そして、話は始まる。

二人の少年がパブ、ホワイトスノウに入ってきたとき、男は遅い朝食をとっていた。

場所はリグラーの片田舎。酒と軽い食事を出してくれる店だ。片方の少年は黒い髪に黒い瞳をしている。もう一人は白い髪に緑の目だ。同じような軍服を着てマントをはおり、肩には銃をかけている。

「まさよしさんって人はここにいますか

白い方がそう言った。

金髪に大柄な男は少し考へるようになしたあと、声をあげた。

「まさよしは俺だ」
手を振る。

「あの」

「なんだ」

「僕はキラと言こます。」しきちはアサヒ」と言いだす。

「何の用だ」

「仕事を頼みたいのですが」

と言つ。

アサヒと呼ばれた方の黒いのは、黙つている。

「何の仕事だ」

「僕たちを森の向こへままで送つてほしいんです。お金はあります
まさよしは考えた。こここのところまともに仕事をしていない。会
社から最低限のお金はもらっているが、生活はぎりぎりだ。朝食は
昼食と一緒にして食費を浮かしている。

「わかった」

と答えた。

森はこの、店がある町リグラーーの西に広がる。車で行く道が一
本通つているが。

「ロウ」

まさよしはコップを磨いているパブの主人に声をかける。

「SO-LAを借りるがいいか」

と聞くと、店の掃除をしていた髪の長い男が、顔をあげた。

「僕も一緒に行つていいの」

「ああ」

「まだいいとは言つてないぞ」

ロウが言つ。

「だめなのか」

「いやかまわないと」

どつちにしろ掃除にしか使えないしな。などと言つ。

森の中はこいつと一緒にのほうがいい。とまさよしは思つ。

「ポミニは

SO-LAが聞く。

「いいぞ」

まさよしはそう答え、キラと名乗つた少年の方を向く。

「こっちの仲間は俺を含めて三人だ」

「森を抜けられるなら、何人でもかまいません」

キラはそう言つ。

「その装備はやめておいたほうがいいかもな」とまさよしは言った。

森を出ですぐに検問がある。民間委託のため、軍関連の人間は受けが悪い。

「来い」

まさよしはさつさつと口のまつに向かう。

「ＳＯＬＡは準備をしておけ」

そう言い残してまさよしは外に出た。「人もついてくる。まさよしは今年一十三歳になる。体はびひらかといふのがつちりしていて、実戦向けだ。

「検問を抜けるときに使う服を手にいれとく必要がある」と言いつつ歩きだす。

街に数軒ある服を扱う店で、一人で選ばせる。

検問はまさよしは顔バスになつているくらいゆるいものだが、軍人は流石に通してもらえないだろう。少年兵らしい。とまさよしは思う。

森を抜ければ中央都市まですぐだ。

「適当に選んで買つたらここに来い」

噴水のある広場で椅子に腰を下ろす。

「わかりました」

無口なアサヒとか言う少年の方は返事もしない。黙つている。少し離れて、まさよしは考えた。脱走兵だろうか。それにしては堂々としているが。ここに来るまでどういった経路でどうやってここにきて何を目的にしているのか。何も分からぬが。まあ、仕事は仕事だ。割と危険なことでもまさよしはやつてのけていたし、仕事は嫌いではない。

「まあ、なんでもいいか」

金はあると言つたが、言つただけだからなあ。あとで踏み倒されたりするんじゃないだろうな。

そんなことを思いながら食糧も積もうと考える。あとで役に立つ

かもしけない。というのは勘だった。車にはもともと予備の保存食が積んであるが。なんとなくだ。まさよしはそういうときの自分の勘は大事にするほうだ。

「何にせよ行ってみてから考えよつ

まさよしはそういう性格だった。

「選んできました」

キラがそう言いつつ来た。紙袋を持っている。アサヒもだ。

「そつか、じやあ車に行くぞ」

「は」

「ああ、その前にちよつと寄るところがあるがな

まさよしはそう言いつと、歩きだした。

雑貨屋で缶詰をいくつか買つ。

「これでよしと」

車の前で一人を待たせていた。

車はホロのかぶつた古いジープだ。乗つていいぞとまさよしが言う。まさよしが運転席に乗り込み、隣にポニコヒロシが乗る。

「攻撃魔法は使えるか」

「僕はオールマイティに使えます」

とキラが答えた。

「アサヒは銃と火炎系の攻撃呪文しか扱えません」

「そうか

まさよしは肉弾戦向きだが、回復呪文の簡単なものなら使える。

「まさよし～用意できたよ」

先刻SOLOと呼ばれていた男が走つてくる。

「こいつは僧侶系の呪文が得意だ

と叫び。

「この白いモモはなんですか。あ、動いた」

キラが聞く。

「ボミコ」

と、SOLAが答えた。

右手に乗せると、しゅるんと触手が中から出てきて、あたりを触つたあとまたしゅるんと中に収納される。

「かわいいでしょ」

と言いつつかばんに入れている。キラの笑顔が多少凍りついたようだが、気にしない。

「出発！」

とSOLAが言つと、ああ、とまさよしは言つた。

森を抜ける前に車がエンストを起こしたのは自分のせいじゃないと思いながら、全員で歩いていく。食料は分担して持つた。この時期、モンスターが活発で車で森を突破する人間は少ない。森を迂回するか、冬まで待つかどちらかである。あとはまさよしのようなベテランの冒険者がたまに行くくらいなものだ。よって、他に助けをもとめて車でなんとかという線は消えた。

食料を余分に積んでおいてよかつた。とまさよしは思つ。

「ついてないな」

と言いつつ歩く。

「なんか鳥の鳴き声もしませんね」

キラが言つ。

「困まれたか」

とまさよしが言つた。

茂みがわざわざと揺れた。

一頭の牛のような生き物がこちらに向かってくる。

「アサヒ」

「ああ」

火炎弾と言いつつ右手から炎を放つ。

「ウシモドキか」

まさよしが言いつつ大人の身体ほどのモンスターが魔術を使ってくる前にこぶしで殴った。

連携プレーをしてくるモンスター群はたちが悪い。キラが呪文を使う。

「氷河」

氷系の呪文のかなり高いレベルの魔法だ。広範囲を凍りつかせばりんと割れた。

アサヒが撃ち抜いた。ウシモドキの皿を。苦しそうで突進してくるのをよける。

SO-LAがポミュを投げる。

ポミュがそらを飛ぶ羽の生えた缶のような小型モンスターの首にまきついて、おとした。呪文を使う前にSO-LAが踏みつぶす。

「えいえい」

などと言っている。弱いモンスターは呪文使えるようになることで身を守っているのだ。

まさよしは刃渡りのあるナイフを取り出してまた突進してくるウシモドキの反対の目を狙って突き立てた。

その場でぐるんぐると首を振りながらウシモドキが声をあげた。「仲間を呼んでるよ、逃げなきや」

SO-LAが気づいて叫ぶ。

「全員逃げるぞ」

まさよしがやつ言つと、全員は走り出した。

途中、旧研究所跡で野宿した。

「ここで出会つたんだよね。僕たち」

「ああ」

SO-LAが眠れなかつたらしく、火の番をするまさよしのところに来た。

「あのときは」

「ん？」

「お前を見つけて驚いたが」

「うん」

あの日は雨が降っていた。とまさよしは記憶している。服はびつたりと体にはりついて動きを重くさせていた。髪の毛から水が滴つて目に入る。ひどい酸性雨だつた。手で擦つたが、鈍い痛みが残る。低く垂れこめた雲から絶え間なく降り注ぐ雨はまさよしを憂鬱にさせた。

「ここで雨宿りするしかないな」

森の途中にあるかつて何かの研究をするために建てられたという建物だつた。何重にもつたが絡まり、灰いろの建物はさらに暗く見えた。噂はいくつかあつたが、あまり中に入つたという人間はいなかつた。なんとなく不気味だから、というのが大半の理由だ。あと、どうやら防衛システムが生きているらしくて、逃げてきた人の話も聞いていた。

まさよしは中に入る。横開きのドアが音もなく開いた。防衛システムがあるかどうかは分からぬが、動力は生きているようだ。

しばらく歩く。

と、人が倒れていた。

「おい、大丈夫か」

旅人にしては何も持つていない。人間か、モンスターかいぶかつたが、まさよしがゆすると起きた。

「あ、人？」

「ああ、人だ」

「良かつた」

「ん」

「僕SOLA。ソーラ。人造人間です。鍊金術でつくれられました」

おなかがすいて動けないんです。トロロアは言った。まあよしが持つてきていた固形食糧を「える」とがばりと起き上がり、食べていいのと聞くのでああと答え、はぐはぐと食べた。まあよしひとみている。人造人間自体は別段珍しいものでもない。どうやら危険ではなさそうだ。

「僕は不良品で」

「不良品？」

「自我があつたらいけなくて、でも自我ができるのはなぜかという実験をして僕はこの奥でカプセルの閉じ込められて。もう解剖とかいろいろ痛いことされるのかなって思つて眠りについたんだけど、それきりで。ここでの動力がなくなつてきたみたいで、ぼくは目覚めさせられて起きて」

と言づ。

「助けてくれてありがとうござります」

「いや、別にそれはいいが」

部屋のなかはひんやりしていた。

「ここでの動力はどうなつてるんだ」

「わかりません」

僕が外に出ようと中からのロックは全部外したんですが。

ちゃんとあのことは丁寧なものの言いをしていたなあとまさよしは思う。

長い髪は金色で、目は深い緑をしていた。今も同じ姿だ。年はとつていくようだが、人間と同じようになるとどうかは知らない。「そとはけつこうモンスターがいるから、出るに出られなくて、そのうちおなかがすいて動けなくなつて」

と言いながらトロロアは奥の部屋に行き、袋を持って出てきた。

「これをあげます」

「なんだこれは」

「秘密です」

「そうか、まあいい」

まさよしは袋の中身も見ずに受け取って立ち上がる。

「一緒に来るか」

まさよしは言った。

「はい」

と答えにっこりと笑った。

「僕はこれでも回復系の魔法は使えますから」

「そうか」

あのときもジープが使えなくなつて大変だったんだ。部品さえあればなる程度の故障だが、森の真ん中でそんなものはなかつた。ので街まで引き返す途中だつたのだ。

雨はまだやまないようで、静かに雨音が聞こえてくる。

「雨がやんだら出発する」

「はい」

やがて雨がやみ、外に出る、トソトソが木の間から見える空を指差した。

「虹」

「ああ」

きれいな虹が見えた。

話をもとに戻そう。

何度かモンスターの襲撃を受けながら森の出口にたどりついたのは次の日の夕方だった。

「着替える」

「はい」

一人が着替えるのを待ち、まさよじが窓口に立つ。
「ちょっと出稼ぎに行くんだが、通してもらえないか」

「ああ、まさよしか」

「仲間がちょっと増えて」

「そりが、じやあこここの用紙に書き込んで」
などと言われて、適当に名前を書きこんで通り抜けてしまう。流石に心臓が痛い。

荷物を入れたかばんのチェックさえなかつた。信用されているとは思うものの、やはり通り抜けてしまつまでは気が抜けなかつた。全員で窓口が見えないところまで歩く。

「なんとかここまでこれたな」

「ありがとうございました」

キラが言う。と、アサヒが突然銃を出した。

「なんのつもりだ」

まさよしが言う。

「アサヒ」

キラが言う。

「こいつらは殺すべきだ」

「この人たちは悪い人たちじゃないよ大丈夫だつて」

「キラ」

アサヒが言う。

「俺達が動いているのを知られるのはまずい」

この平和な辺境で兵士のかつこうをするほど目立つことはないと思つたが。そのことは気づいているのかいないのか。アサヒが銃を持ち直す。

「お前たちの旅の目的はなんだ」

まさよしは聞いた。聞いた後にはひけなくなる。なぜかそう思つたが、まさよしは聞いてしまつた。

「シールド」

SOL Aが呪文を唱えた。高度な僧侶呪文のひとつで、アサヒとキラの周りに張られる。物理、魔法両方の攻撃を結界より外にできなくさせるものだ。

「僕を甘く見ないでね」

アサヒが銃をおろした。

「レインボープロジェクト」

「レインボープロジェクト?」

「ああ。俺たちの国で行われた魔導士狩りの名前だ」

「それをこの国でもやろうとしている人たちがいるんです。それを止めるためのゲリラ集団の中で僕たちは働いています」

「魔導士狩り」

まさよしはうなつた。

「噂は本当だったのか」

「うわさ?」

「ああ、噂だ。L-H-S……俺が所属する会社の上の方がな、隣の国がきな臭いと言つて話していたんだ」「レインボーってなんかきれいな名前」

SOLAが言つ。

「きれいなものか」

アサヒが言つた。

「僕の父親がレインボープロジェクトで連れていかれて帰つていな
いんです。アサヒは両親が

「そうだったのか」

まさよしは言つた。

「俺たちも行こ」

とまさよしが言つた。

「アサヒ、一緒に来てもらおうよ」

「キラ」

キラの言葉に、アサヒはため息をつき、やがて言つた。

「わかった

と。

「まさよしさんには僕だってついていくもん

「SOLA」

「なに?」

「二人の結界をといてやれ

「はい」

手をあげて、解呪と叫ぶと消える。

全員が、歩きだす。歩きながらキラがまさよしに語りかけた。

「ありがとう」「ぞこます」

「いや、いいんだ」

「」の先に俺が育つた教会がある。そこに寄つて一泊しよう。

まさよしが言つ。

まさよしには親がない。孤児として育つた。だから、親というものの概念は分からぬのだが、大事なものだという認識はあつた。家族はいたし、大事なものだとも思つていたからだ。

SOLOAが古い歌を口ずさみながらポミコを抱きかかえている。ポミコは丸い毛玉だ。

「どうしたのポミコ」

SOLOAが言いつづけを離した。と、転がつたポミコが白いワンピースを着た少女に変化する。

「ミコ」

ポミコは擬人化するとのできるモンスターなのだ。

「ああそつか」

SOLOAが笑う。みんなに触られるのいやなんだ。と言つ。

白い毛玉のままで行くと、教会の子供たちに揉みくちゃにされるのだ。小さい子供は愛情が凶器だからなあ。とまさよしは思う。

教会へ行く道に曲がつて、じょりく歩くと教会が見えてきた。小さな教会で、そのとなりにある建物が孤児院だ。外で遊んでいた子供の一人がまさよしだと叫ぶと、ほかの子供たちもわらわらと出てきた。まさよしはそのうちの一人が走つてくるのを抱きとめる。「」の人たちは？」

その後ろから、長そでにスカートをはいてエプロンをした女が来て言つ。

「旅の仲間だ」

「そうなの」

「今日は一泊もせてくれ、明日には出でる」

「今回は長いの?」

「わからないな、長いかもしねない」

「そう」

まあよしの幼馴染で、今の孤児院を支えてる人だ。以前はセイと云つ。

「セイ」

「なに」

「今日はマザーは」

「いらっしゃるわ」

「やうか」

マザーといつのは、教会の尼をしてくる人で、まあよしの育ての親だ。まさよしはお金ができるといつに寄付に来る。

「泊るとこを用意しますね」

「ああ、ふた部屋あればいい」

アサヒとキラは一緒にいし、まさよしとヨーハンとボノンは一緒にい。

「わかりました」

セイが語つとにいつと笑う。

「私にはまさよしの仕事が分からぬいけど、でもあまり危険なことはしてほしくないわ」

「ああ」

「心配なのよ」

「わかつてゐる」

幼馴染のセイは、そいつの心を変える。

「さあ、頃はんにしますよ」

「わー」

子供たちが競つて部屋に戻つていく。

アサヒとキラも無言でついてくる。SOLAはポニコの手を引いてついてくる。

「セイさん」

SOLAが言つ。

「何?」

「まさよしくんは僕がついてるから大丈夫」

「ええ、分かつてるわ」

SOLAはあつてはいけない人格を持ち、呪文をマスターし、食事をして息をして普通に生活する人造人間だ。

ふだんはでもパブの掃除くらいにしか役に立たない。

セイはまた笑う。

「あなたたちの冒険の話をまた聞けると思つとうれしいわ」「うん」

昼ごはんは、パンとスープ。

質素だが、暖かいスープは美味しい。

「おいしい」

とキラが言つ。

アサヒが無言でゆつくり食事している。SOLAはパンをちぎつてスープに浸して食べている。まさよしはパンをかじりながらポニコのほうを見た。ポニコは食事をしないので、椅子に座つてぼんやりしているようだ、ようだ、というのは表情がなくて何を考えているのかさっぱり分からぬモノスターだからだ。突然変異なのか、なんなか分からぬが、森でSOLAが拾つた。森の中で白色は目立つ。のではないかと思うのだが、そのせいで親にでも捨てられたのだろう。白色のモンスターだった。

「食べた?」

セイが言つ。

「ああ」

「食べたら仕事」

「何をすればいい

「洗濯の手伝い」

「わかつた」

子供たちは遊ばせておいて、木のたらいで洗濯をする。

一番近い村で作つてもらつたらしいだ。

「まさよし」

「なんだ」

「ぽみゅがいない」

「いない?」

「探してくる」

ど、SOLHAが言ひ。

「迷子になるなよ」

「わかつてゐるつて」

まさよしはなんとなく厭な予感をかかえながら、洗濯物を『じご』
しと擦る。

アサヒとキラは黙つて洗濯物を干している。

「わああああ」

と子供たちの声がして、SOLHAの声がそれに重なる。

「シールド」

「なんだ」

まさよしが洗濯の手を止めて、建物の裏手に入る。

子供が数人倒れていた。

「どうした」

見ればぽみゅが腕を触手に変えてウシモジキの首に巻きついてい
る。

「ウシモジキか」

ぽみゅの触手がよほど苦しいらしく、反対の方に走つて逃げてい
く。ポミコが離れてぼたつと落ちる。と、少女の姿に変わった。

「」のあたりにもモンスターが出るのか

出てきたセイに聞く。

「ええ、最近時々ね。ほとんどは村の方に出るのだけれど、たまにこ

「ちらりとも出るわ」

「子供たちにけがはないか」

「大丈夫、ぼくがシールド張つたから」

SOLOAが言つ。

「解呪」

手を前に出して印を結び、子供たちを包んでいた結界をはずす。

「農作物をだいぶ荒らしてゐるらしくの」

セイが言つ。

「今年は夏が短いみたいで、それを察知して出でてくるみたい」

「そうか」

「マザーがそつおつしゃつていたわ」

餌を求めてここまで来るのだと。

セイが言つ。マザーは昔魔女だつた。ある日迷い込んだ子供を保護して、子供を保護する仕事をしようと思つたが、出家した。

「マザーに会えるか」

「会つてこぐの?」

「ああ」

「まさよし、また喧嘩しちゃわない?」

「大丈夫だ」

まあよしことマザーはしじつちゅう喧嘩するので、セイはあまり会わせたがらない。マザーのぜんそくの発作が出るからだ。

「たまには顔を見たい」

まあよしが言つ。

「珍しいこともあるわね」

いつもは会いたいなんて言わないので。

「そうだな」

「厭な予感とこつやつかしさ」

「ああ」

まさよしが立ち上がる。

「奥か?」

「ええ」

廊下を通りて奥へ。
入つていいく。

机の上に載せられたパンが半分になつていて。半分しか食べられないのだとまさよしは気がつく。

「元気か」

「まさよしかし、また来たのかいー。」

「元気そうだな」

「ふん、元気で悪いかい」

まさよしは笑う。

「顔を見に来た」

まさよしが言つと、マザーは静かにまさよしを見た。

「今度の仕事は長くなる気がする」

「そうかい、せいせいするよ」

「ああ」

椅子に座つたマザーがそつそつと歩けないのだ。移動はもつぱら車いすだ。

まさよしは笑う。

「今日は泊つていいく」

「そうかい」

マザーは言つとため息をついた。

「まだ危険なことをするつもりだねえ」

「ああ、他に仕事はないしな」

「セイを泣かせるんじゃないよ」

「わかつてる」

まさよしは部屋を出た。

星空が怖いくらい綺麗に見える。まさよしは窓から外を見た。
静かな夜だ。明日はどうなるか分からぬがよく眠つたほうがいい

いだろつ。

星に願いをかけるほど、ロマンチストではない。でも、この星空をまた見たいと思つ。どうも今度の仕事は厭な予感がしているのだ。ゲリラ側に加担する、とは要するに政府にたてつくということでもある。今のところまさよしが住んでいるところではレインボープロジェクトは行われていないが、レインボープロジェクトで一体何をするつもりなのかも知りたかった。

「厭な予感つてのは当たりやすいしな」

呟く。と、「もう食べられないけどまだ食べる」と横で声がした。SOLAだ。良く寝ていろと思つたが、と見ると寝言だったらしい。寝がえりをつっている。

「俺も寝るか」

と言つと、まさよしはふとんをかぶつた。

静かな夜の帳がまさよしを包みこみ眠りに落ちた。

朝から快晴だつた。

まさよしは外に出る。

井戸で顔を洗い、タオルでふくと、子供たちの起き出す音がする。SOLAが目をこすりながら出てきた。

「まさよし~」

「なんだ」

「変な夢見た」

「そうか」

「ドームが真っ赤に燃える夢」

と言いながら、井戸のポンプを動かして、水を出して顔を洗う。

「予知夢か」

「う~ん。分からぬ」

SOLAの力のひとつ、夢見。たまに当たることがあるのだ。中央が燃えたら大変なことになるな、とまさよしは思つ。

「力、また安定しなくなつてるんだ」

SOLOAが語り。僕欠陥品だしねえ。と呟くように言いながら顔をふいでいる。

「まあとにかく彼らと一緒に行動してみるしかないね」「知った以上、やりとげるつもりでしょ、まさよしくん。

SOLOAに思考を読まれた、とまさよしは思つ。ばんやりのらりくらりと生きているようで、SOLOAは「いろんな」とを考えている。

「俺の思考を読んだか」

「ううん、なんとなくお人よしのまさよしぐんのことだからそんなところだらうと思つて」

「……うるさい」

「うん、ほぐうるさいよ」

くすくす笑いながらSOLOAが部屋に戻つていぐ。

「朝食のパン作り立てらしいよ～」

と言い残して。

「パンか」

のんびりと歩く。中央まで歩くのはこれから大変だなと思いながら。

ら。

朝食を食べ終わり、食糧をリュックに詰めて、まさよしたちは出発した。一人の少年は普通の服を着ている。軍服は背負つていてる。捨てるか迷つっていたようだが。

歩き始めると全員無口になつた。

モンスターが数回出たが、なんとか切り抜けた。

少しずつ一人のスキルが上がっているなと思う。戦つ中で強くなつていくのだ。

日が傾いて薄暗くなつてくる。まさよしが立ち止まつた。

「強行軍はやめたほうがいいな」

一人がつかれているのを見て、まさよしは言ひ。

「ここで夜嘗をする」

「わかつた」

アサヒが言ひ。キラは返事をする体力も残つていなによつだ。うずくまる。

木を運んできて火をつける。

「夜は火を絶やすわけにいかないからな、順番に起きて火を見るぞ」

「キラは寝かせてやつてくれ」

「そうだな」

キラはもうひとつとし始めている。

「俺がその分起きる」

とアサヒが言つた。

「そうか」

まさよしはそう答える。ここまで一人きりでよくやつてきたものだ、とまさよしは思つ。隣の国から越境するのはおとなでも大変だ。今は沈静化してはいるものの隣の国との正式な国交はいまだにされていない。戦争がまたくるのではないかといつ見方もある。

「戦争か」

まさよしは戦争孤児だった。教会に引き取られ、手のつけようのない悪がきだつたのを、マザーは受け入れてくれた。この悪がきがといつも言われながら、でも育つて教会を出て、稼いだ金の半分は孤児院にいれている。

昼間、歩いているときにキラが言つていた。

「ぼくたちは戦争を経験していません」

キラが言つ。そうだろう。まさよしは思つた。

「でも戦争を繰り返してはいけないといつのは分かります」と言つた言葉に嘘はないだろつ。

「本当は戦争は終わつてないのかもしれないな」とまさよしは言ひ。

「ああ」

アサヒが答える。

同じ言葉を使い、同じ宗教を信じ、それでも国の引いた国境線を境に殺し合つ。それがいいことだとはとても思えない。

戦争が終わつたと政府が言つてから十五年。まだくすぶる火種があるのだ。

「レインボープロジェクトがどういったものだったのか、分かるようにもう一度説明できるか」

「わかった」

アサヒが言つ。

キラはもう眠つてしまつている。アサヒはそっとマントを被せた。「レインボープロジェクトは、魔導師たちの持つエナジーを集めて兵器をつくるところ計画の名前だ」

そこまでは調べた。と言つ。

「兵器を発動させて隣国と故郷で同時に攻撃して、中枢を破壊して制圧する、という計画らしい」

聞かなきやよかつたなとまさよしは思つ。

「俺たちばいのプロジェクトをつぶすために動いてい」

「そうか」

まさよしは言つ。

「両親が連れて行かれたと言つていたな」

「ああ」

「いっだ」

「おととじのことだ」

「そうか」

「俺たちは親がいなくなつて収容された軍の少年軍部隊で知り合つた。キラは母親がもともといないからな、父親がいなくなつたら放り込まれた。俺は両親がいなくなつて放り込まれたんだが」「情報はどこで得たんだ」

「キラがコンピューターに接続された時に逆にコンピューターの中を探つたと言つていた」

「そんなことができるのか」

「ああ」

キラの特殊能力なんだ。と答えながらアサヒがため息をつく。

「一人で逃げてきた」

「二人きりで？」

「仲間がいる」

と言う。

仲間、か。

まさよしは思う。

「とりあえず俺たちはこちら側の国を任されたんだ」「動かないよりは動いたほうがいいな」

「ああ」

「少人数で動いたほうがいいと、一人でここまで来た」「大変だつただろう」

「俺の両親ほどの大変さではないはずだ。まだ生きているかどうかも分からぬ」

「そうか」

「あなたは、あの孤児院で育つたんだろ？」「そうだ」

「SOLAに聞いた」

とアサヒは言う。寡黙だと思つていたが、意外にしゃべる。

「俺は親を知らない」

とまさよしは言う。

「でもまあ、それでも生きているがな」

親との絆とか、そういうものは分からぬが、家族が大切なものだということは分かつてゐる。教会の人間はみんな家族だ。

「どうした」

うつむいた顔に影が落ちる。

「親なんてどうでもいいと思つていたんだ」

「そうなのか」

「ああ、俺の家族はバラバラだった」

アサヒは言つ。

「厳格なようで愛人を囮う父親と、それに従つてゐるようで不倫をしていた母親と、俺という家族だつたんだ」

「そうか」

「ああ、俺はそれがいやで家を出ようと思つてゐた。その矢先だつたんだ、今度のことは」

アサヒはそう言つとため息をついた。

「すまない、こんな話をしても」

「いや、別にかまわないが」

「話すつもりはなかつたんだが、あんたには話しても大丈夫なような気がしたんだ」

まさよしは少し笑う。

「まだ若いんだ、いろいろある」

十代か。

俺の十代のころはもう仕事をしてゐたな。とまさよしは思つ。まさよしは森のデータをとる仕事をしてゐた。モンスターがどこにどれくらいいるのか調べて中央へ送る仕事をしてゐた。金がどこから出ているのかは知らないが、それなりにお金になる。体をはつて仕事をするのだ、割に合わない金額だとは思うが、他に仕事がない。いや、仕事はあるのだが、人を殺すとか人を拉致するとかそういう危ない仕事が多いのだ。世も末だ。

「戦争が終わつて十五年か」

アサヒもキラもお金のあるうちに生まれたようだとまさよしは思う。言葉の発音がきれいなのだ。まさよしの発音はかなり訛りが入つているのだが、まあ会話はできる。

「俺は八歳の時に戦争が終わつたんだ、両親がいつになくなつたのかは分からぬが、気づけばストリートチルドレンだつた。まあ孤児院に入つたのはそのあとだが」

今二十三歳だ。

「俺は悪がきで。町でも何度も保安官のお世話をなつてゐた。すり

の常習犯だったんだ」「

「すり」

「ああ。知らないのかすり」

「なんだ、すりといいうのは」

「気づかれないように人から金を取る人のことを言つんだ」

「そうなのか」

「ああ、金のありそうな人間にぶつかりざま財布を抜いて生活していた」

「そんな過去があるのか」

「ああ」

でもマザーはそんな俺を拾ってくれた。と言ひと、アサヒは笑う。

「喧嘩の声、下まで聞こえていたな」

「ああ、喧嘩できるうちは喧嘩しておいつと思つていの」

「マザーも歳だ。いつか話しもできなくなるんだ。と思つ。

「もう寝ろ、しばらく俺が火を見ている」

「ああ」

アサヒがキラの横に横たわる。まさよしは火を見つめながら考えた。魔導士として素質のある子供も孤児院にはいる。子供たちが連れていかれて兵器の材料にされたらと思うと腹の奥からいやな感情が湧きあがった。

「厭な予感ばかり当たるからな俺は」
咳きながら火に枝をくべた。

夜中に一度アサヒと火の番を代わり、明け方近くはSO-LAが番をしていた。

「来る」

SO-LAの声で目が覚めた。朝一番で何事だと思い、まさよしは

起きる。

「何が来る」

「わからない、でも大きなもの
アサヒとキラも田を覚ます。

「鳥だ」

キラが叫ぶ。

「怪鳥カレンドか」

「なんで今みたいな時期に?」

まだ春先である。もっと暑い時期に渡りてくる渡りをするモンスターだ。

「伏せて」

SOLOAが叫ぶ。

全員が背を低くする。

すれすれを飛びながら警戒音を発する。女の悲鳴のような甲高い声。

「巣の近くで野営したみたいだな、逃げよ!」

荷物を持って走りだす。

何度も鳥が旋回していくが、やがていなくなる。

「よかつた」

キラが叫ぶ。

「この先はモンスターも減る、中央まではいくつかの街を通る」
まさよしが地図を出す。

「これが地図だ」

紙を広げる。

「ここがいまいる地点。ここを超えると一週間ほどは人家のないと
ころを通り

だがモンスターは出る。

「食糧になるモンスターが出たら基本的にそれを食べるのは止める
まさよしは言いながら地図をずっと指でたどる。

アサヒとキラは覗きこんでいる。SOLOAは退屈そうであべびしだ。

「とにかく行こうよ、中央まで

SO-LAがそう言つと、全員が動き出す。

「そうだな、とにかく行ってみよう」

とまあよしは言つ。いやな予感を振り切るよつて歩き出す。

中央まで一週間で着いた。最速記録だなと呟きながらまさよしは
とりあえず宿をとることにする。いつも泊っている宿で手続きを済
ませ、食事をし情報を集めることにする。

「何食べよう」

ウシモドキの肉ばっかりだったから、なんかおいしい野菜が食べ
たいな。とSO-LAが言つ。

「野菜か」

サラダサラダ。と言いながら店に入つていいく。無国籍料理パイジ
ヤン。いきつけの店だ。

「おいしそう」

バイキング形式の店だ。まず人数分金を払い、入つて好きな料理
をとつて食べる。

「キラ、もつと食べたらどうだ」

アサヒがそう言いながら何かの肉のから揚げをとつてている。

「うん」

キラは小食らしく、食べないのだ。

「調子悪いの?」

SO-LAが聞く。

「そうじゃない、食べられないんだ」

不安で。と、キラは言つ。

「無理しないで、少し休んだほうがいいかも」

SO-LAが言つ。

「大丈夫です、体がどうといつのではないので」

キラがそう言いながら白い髪を耳にかける。

「しんぱいかけてすみません」

「いいけど」

SOLAが言う。

「不安か」

まさよしが聞く。

「はい」

緊張と不安は失敗を連れてくるものだ。

「リラックスリラックス」

「お前はリラックスしすぎだ」

「え？」

まさよしは SOLAに軽口をたたきながら「コーヒーを取りに行く。飲み物も飲み放題だ。

「おいし～」

SOLAが言う。

SOLAはやたらに食べる。どこにそのエネルギーが消えているのか、太るということはない。どうなってるんだろうなあとまさよしは思う。

「錬金術か。」

歴史の裏で絶えず行われていた錬金術と、魔法。それが科学と融合し、今の世の中を作っている。混沌の時代が来た、とは200年ほど前の錬金術師の言葉だが、今も混沌は続いている銃と剣と魔法の世界。それがいまの世界だ。

食事が終ると宿に向かう。

「でもさ」

「なんだ」

「人体実験はしちゃいけないのに人造人間には実験してもいいって変だよね」

僕にだつて人格あるしさ、機械人間のほとんどにも人格らしきものつてあるでしょ。

「ああ」

「僕は実験を免れただけど、今も僕みたいなつくられた人がいるのか

「そうだな

「僕はそういう人を見つけて知りたいことがある」

「なんだ

「教えない

SOLAは言つ。

「まさよしくん絶対笑うから

「やうか

まさよしは薄く笑つた。ほら、笑う。といふSOLAが言つた。

不思議に心が落ち着くやりとりだなとまさよしは思つ。

「そろそろ寝るぞ

「はい

ぽみゅが部屋の隅に転がつていぐ。寝る位置を決めたようだ。SOLAが壁際のベッドにもぐりこんだのを確認したあと、まさよしは電気を消した。

夢を見た。かつての仲間の夢だ。故郷を出ていき、もひ何年も便

りがない。

何が正しいんだろうな。

彼の口癖だった。

まさよしはその声にこたえようとして声が出なかつた。正しいことなんて世の中にはないんだと彼はよく言つた。いつも何かを隠しているようだつた。何を隠しているのか聞きたかつたが、最後まで教えてはくれなかつた。今もある時、お前は本当は何を考えている、と聞けばよかつたと思つ。彼は振り返らず出て行つた。

夢か。

田覚めてしばらくなつてしまつとしていたが、まさよしはじばらく余韻

に浸っていた。思いだすとこう」とせあにつがまだ元気に生きていける証拠のような気がするのだ。俺の中にある限り、生きている。まさよしさ思つ。じばりく考えていたが、やがて田を上に上ざると、裸電球にポミコがくつこっていた。

「なにやつてるんだ」

つぶやくとぼとつと落ちてきて、まさよしの顔を直撃した。

「うつ

ポミコをつかんで下ろす。あるすると移動して、SOLAのベッドに上がつていつた。

「なんなんだ

寝ぼけたのか？　と思つ起きて上がる。今ので完全に起きてしまつた。

「もう食べられないよ

SOLAがまたつぶやいてくる。食べる」としが頭にないのか。とまさよしさ思いながらベッドから降つた。カーテンを開けると町並みが見えた。

高い建物とそうでもない建物が向面してくる。

「静かだな

窓ははめ殺しの窓だ。遮音してあるよつだ。

「なんとかしないとな

まさよしはひとりじめ、黙つこむ。眠る気が失せてしまった。

静かだつた。

SOLAが寝がえりをうつじながらとこつ音がいやに耳につく。なんだらつ。今自分は不安なのか？　と思つ。不安。普段の生活だって不安じやないとは言えないわけだしと思つ。話がでかくてついていけないとも思つ。体を動かすのは嫌いではないし、体ひとつで仕事してきた。だが、今は違う。考えなければならぬ。

「考えるのは得意ではないしな

考え込む。

「あいつがいたらな、どんな答えを出しだらう

まあよしは思うが。

「眠れないの？」

と声がしてUO-LAのせつを覗みると皿を口にすりつけていた。

「起いしたか」

「ん……やうじやないけど。トイー」

「行つてここ」

「うん」

「Jセーラーとトイレに消えてこべ。

「考へても仕方がないか」

まあよしは思う。

ぐるぐる回つていの思考を持て余す。考えなくてはならないが、考えたとしても答えはない。正義なんてただのまやかしだ。
戻ってきたUO-LAがこちらを向いた。

「まあよしくん」

「なんだ」

「まあよしくんはもう選んだんだから、この道を突っ走るしかない
んだよ」

運不運はあるけど、それでも生きなきやなんないのはみんな同じ
だよ。とUO-LAがあくび混じりに言ひ附。

「ね

「ああ」

「じゃ、寝る」

「ああ、お休み」

「お休み」

UO-LAはことんと睡る。

まあよしも目を開じた。そのまま寝てしまつたのだと気づいた
のは翌朝だった。

「おはよーまあよしくん」

「ん」

UO-LAの呟るご声が聞こえる。眼をさめさせる。

「今何時だ

「九時！」

「寝過ぎしたか

「早く着替えて『じはん食べ』に行かなきや」

「そうだな」

朝食は頼んでいないので、適当に食堂を探さなければならぬ。着替えて外に出る。

アサヒとキラもちよつど部屋から出でました。

「おはよう『じやこます』

キラが言つ。アサヒは無言だ。

「『じはん食べ』に行くよ

SOLAが言つ。

「わかりました」

キラが言つ。疲れはとれた？ とSOLAが聞いて、一人で会話している。まさよしはそれを見ながら後ろからついていく。

アサヒは無言で先頭を行く。

「で、ね、どこで食べよう

「外に出てから決めるか」

「うん」

宿のフロントを通り、外に出る。朝から辺りには屋台が出ている。

「『じはんごはん』

適当な店に座って、注文する。おかゆとおかずのセットが出でき

た。全員同じものだ。

「とりあえずこんなところ」

「そうだろうな

SOLAはいつも数軒はしごする。

まさよしもかなり食べるほうだが、SOLAの食欲は桁が違う。

「先に戻つてもいいよ

「いや、お前が迷子にならないならいいですが

まあよしは言つ。

「迷子になんかならないもん」

「過去そういうつてならなかつた」とことがあつたか

「ないけど」

「ぼくたちは戻つてますね」

「ああ」

俺は「」に付き合ひ、と「」おやよしはバーへを注文する。

「まあよしぐん」

「なんだ」

「今日はどうするの?」

「とりあえず情報を集める」

「人がいなくなつたところから話を始める。」

「どこで」

「情報屋を当たろう」

「知つてるの」

「まあ、少しだ」

危ない橋を渡つたことがないわけじゃない。普段の仕事だけでは金が足らないときにして仕事のスキルが役に立つだろう。

「まあよしぐん」

「なんだ」

「なんかあの一人だけにして大丈夫かな」

言いながら「」がメニュー表に手を伸ばす。

「あ、これとこれとこれください」

などと注文する。

「大丈夫だと思うが」

心配になつてくる。

「」がみゅーと鳴く。

「」はんのお金も持つてないだろお前

「うん」

SOLAの食費はまさよしが稼いだ金で賄われている。まあでも SOLAのかげで怪我はすぐに治せるようになり調査での危険はずいぶん減ったわけだし、一年の半分以上を森ですごす一人は、食糧には困らない。食べられる獲物を探せばいいからだ。

「おいていけない？」

「ああ」

まさよしの言葉にSOLAが笑う。

「過保護だつてまた言われるよ、マスター」

「口ウニカ」

「うん」

でもまあ、いいけどね。とSOLAは笑う。

「さて次の店」

「まだ食べるのか」

「もちろん」

まさよしはため息をついた。屋台で食べると食事はどうも安い。無許可で路上でやつていて、金をその分払わなくていいからだ。

「あ

「なんだ」

「あれ食べたい、前に食べたやつ、なんだっけ

「食べ物で忘れることがお前でもあるのか

「あるよ！」

「うーんとうなるSOLAを見つつ今度は酒を頼む。

「昼間から酒？」

と咎めつつまた何か料理を頼んでいる。

「あ、思いだした」

料理がまたたく間に運ばれてくる。それを片っ端から食べている。

「思いだしたか

うん。と言いつつスープを飲み干す。

「じゃあこいつ」

「待て」

「もう、おこてつちやうよ
ビールを一気にあおり、立ちあがる。

「待て」

「ん?」

「何か来る」

まさよしが構える。ざやうーと鳴き声がして鳥が飛んでくる。複数だ。

まさよしに襲いかかる。見たことのないモンスターだ。

「なんで俺のところに」

言いながらくちばしをよけて腹を殴ると一羽落ちた。

「逃げるぞ」

言いだし、走り出す。

「待つて」

「お勘定!」

店の店主の声も振り切りながら走る走る。ポニコをかかえてSOLAも走る。

ついてくる鳥たちは、飛びながら急降下してきて、まさよしの髪すれすれを飛ぶ。

「ほ縛」

SOLAが呪文を唱え、振り返つざま術を投げる。網の目状になつた水が鳥の一羽を落とす。

「きりがないな」

鳥が入ってこられないような細い道を見つけ、入る。網目状に発達した街路は迷路のようで完全に元の場所の位置はつかめなくなつた。

「ここまでくれば大丈夫だと思つよ

「ああ」

上を見上げ体を隠す。

「なぜ俺たちを狙うんだ」

「さあ

SO-LAが言い、ため息をつく。

「まさよしくん」

「なんだ」

「これは攻撃だよね」

「そうだな」

「敵が名乗ってくれるといいのに」

「ああ、誰が俺達を攻撃しているのかわからないな
まさよしは考える。」

「あの二人、一人きりにしてよかつたかなあ」

「宿に戻るか」

「うん」

なんとか道をさがして元の宿に戻る。

「大丈夫みたい」

空を見ながら中に入る。

ドアをたたいた。

「アサヒ、キラ、無事か」

「どうしたんですか」

キラが聞く。何もなかつたようだ。

「いや、鳥のモンスターに襲われて」

「森でも襲われましたよね」

「違う種類だつたが」

しゃべっているとアサヒが窓の外を見て強く言った。

「ふせろ」

ガラスを割つてさつきの鳥が突つ込んでくる。

キラが電撃の呪文を唱え出す。

「間に合つか」

体長一メートルほどの鳥だ。モンスターとしてはさほど大きくないがするがするどい嘴が威嚇するようにかちかちと音を立てている。

「放電」

ぱちぱちと光が輝く。眼がくらんだ。

黒こげになつた鳥が数羽、落ちる。

「やつたか」

「まだいるぞ」

アサヒが銃を構える。撃つ。眼を撃たれた鳥が旋回しながら落ちていく。射撃の腕前は大したものだ。

「これで全部か」

なんとか終わる。窓ガラスが割れた音で宿の主人がやつてくる。

「モンスターだ」

とまさよしが言つと、主人は青い顔をしている。

「なぜうちの宿にそんなものが」

「わからないな」

モンスターは都会に近づけないよう、町にはシールドが張られ、見張りも立つ。

「何がが起きているのか

まさよしはつぶやく。

「何にせよ監視委員に連絡を

主人にそう言つと、そうですねと言つて出でこぐ。

「なんだろうな」

モンスターマスターがいる可能性もあるなとまさよしが言つ。

「モンスター・マスター」

「ああ」

「まさか、あいつか

と呟く。

「追つ手かもしだません」

アサヒとキラが言つ。

「追つ手がいるのか

「はい」

キラが答える。

「先に言つべきだつたな

まさよしが言つ。

「国境を越えてはこな」と思つてました

「そりか」

「JAPの國に入つてきつた」とだよね

「そりですね」

「こゝを戦場にはしたくないな」

まさよしは言ひ。

「そりですね」

「とりあえず夜を待つか、暗くなつてから動けばだいぶ違つはずだ」
まさよしは言ひ。

「こゝちか」

じたどたと足音がする。数人の男が来た。

「モンスターが現れたと通報があつたんだが、こちらですか」
男が聞く。

「そうだ」

まさよしが答える。

「あ、LHSの方ですか」

「そうだ」

まさよしの所属する会社だ。上着に会社に所属しているしで
あるタグをシャツの腕につけている。モンスターの調査をすること
でも有名な会社なので、知つているのだらう。

「モンスターは」

「見たことない種類だつたな、バード系のモンスターだ」

「そうですか」

と書類を書きだす。

「どんな感じでしたか」

「絵を描こうか」

とまさよしは自分のペンを出す。

「お願いします」

新しいモンスターを発見した場合に絵を描く欄があるので、まさ
よしは基本のスケッチ力はある。

「くねばしさはこんな感じでサイズはこれくらいだから、
などと言いつつ記入していく。

「ありがとうございます、助かりました」

「このあたりでモンスターが出たことは」

「ありません」

と、男はいう。

人の多いところは嫌うモンスターが多いが、中には人と暮らすモ
ンスターもいる。

人と一緒に暮らしているモンスターには届け出が必要だ。まさよ
したちはぼみゅをちゃんと届け出して一緒に暮らしていく。
ぼみゅは少女の姿をしてSOLAのそばに立っている。
男たちはぼみゅがモンスターだと気づいていないようだ。

「そうか」

「飼つてる人もいないんですねか」

SOLAが聞いた。

「小さなものはペットとして認可しますが」

「そうですか」とSOLAが言つ。

やはり追いかけてきたとみていいだろう。

男たちはなぜこんなところまでと話し合つていたが、引きあげて
いった。

「行つたか」

まさよしは嘆息しつつ一人を見る。

「厄介なことに首を突っ込んだと思つてゐるでしょ」

SOLAがそう言つ。

「いや、そんなことはない」

「じゃあ、楽しんでる?」

「それはお前だろ?」

「バレてた」

「ああ」

まさよしは考へこむ。

おもてなしの心」と、部屋に向かう。

部屋のガラスも割られている。

「盗られたものがなにかあるかも」

ないな」

貴重品は身につけてこぬのでござるまい」ともない。あるのは着

替えと携帯食が少々。

「袋は？」

袋？」

古事記傳

卷之三

二、三度の間隔で、各測定位置に於ける測定値を算出し、各測定位置の測定値の平均を算出する。

「よがつた」

「だいじなものなら自分で持つてろっていいたい」ところだが、

卷之三

「世界文化」編集委員會

「アーヴィングが書いた、『アーヴィング』

۱۳۴

おもてのへだてに、この波に、おもむかせた。

「お前は一体いつも何考へてゐるんだ？」

「何にも考へてないよ」

即答が返ってきた。

「みゆ」

ぽみゅが何か言いたそうに転がつてくる。少女の姿はやめたよ

だ。

「さて行くぞ」

廊下に出るとキラとアサヒが待つている。

外に出て、しばらく歩いて市場を通り抜ける。雑踏の中をはぐれ
ないように注意しながら歩く。

だんだん中央に向かっていくにしたがい人が減っていく。

「この先です」

キラが言つ。彼は一度覚えたことはほとんど忘れないといつ。
「地図は一度見れば大丈夫です」

と言う彼は、こちらに来る前に、この国の地図をほとんど丸暗記
してきたそうだ。

「スラム街に彼らのアジトがあるのが分かつています」

「アジトまでわかっているのか」

「ええ、潜入した者がいるんです」

「そうか。とまさよしは言つ。

「潜入した本人は」

「まだそちらにいて手引きしてくれることになつてます」

「どうか」

情報はいくつあつてもいい。

「とりあえず俺の知つている情報屋にも連絡をとつてみるが、かま
わないか」

「はい」

全員で路地裏の小さな立ち飲みバーに入る。客はいなかつた。

「すまない、霧の湧く時間が知りたい」

「わかりました、すぐですか」

「ああ」

男は奥に引つ込んですぐに出でくる。

「今日の夜8時にならないとマスターが来ないので」

「そうなのか」

「はい」

「霧の時間は無理ですが、次の風の予感はいますよ」

「じゃあそれで頼む」

「わかりました。奥へ」

カウンターがひらいて、まさよしは中に入る。

「ここにしてくれ」
と言い残し入っていく。

薄汚れたフードをかぶった人間らしきものがつづくまつていた。
バーテンはそのフードに近寄つていぐ。フードガ頷いた。
バーテンが部屋を出していく。

「何を求めてきた」

「情報を」

「なんの情報だ」

フードのなかから聞こえたのは割と若い男の声だった。
「レインボープロジェクトについて知りたい」

「レインボープロジェクトか」

男はそう呟くとぼそぼそとしゃべり始める。

「隣国で行われているテロプロジェクトだ。表向きはテロリストが
やっていることになつていてるが、実際は国が噛んでいる
「どこでそんな情報を仕入れてくるんだ」

「それは言えない」

男は言うと、金をくれるならもう少し話すが。と言つ。たのむ、
とまさよしは言って金の入つた袋を出した。

男は中身を確かめてから、静かに話しだす。

「聞いた話だがな、レインボープロジェクトで捕まつた人間を材料
にして魔法兵器を作るという話だ。それをこの国に持ち込んで作動
させる。國の中核が破壊されたらテロリストたちが國を乗つ取る、
という計画だ」

「そこまでは俺も知つていい」

「では、この国での一番大事な場所で行われている魔術にそれをぶ
つけるという話は?」

「一番大事?」

「ああ、五か所の魔方陣を使った魔術だ。この国を守り発展させてきた魔法」

「ユータムの五方陣か、ほかには?」

「わからない」

男は言った。

「俺が知っているのはこれだけだ

「わかった」

ありがとう、と言つて部屋を出る。外では全員黙つて立つていた。

「どうでした」

「テロリストたちがどこを狙うかがわかつてきた」

「本当ですか」

「ただの情報だ、確かめなければ本当かどうかは分からぬ」

まさよしはそう言つた。

「急ぎましょ!」

キラが言つた。

「そうだな」

まさよしは答えた。

まずキラが、仲間と連絡をとる、と言つた。

「危険じゃないか」

まさよしは言う。

「そうですね、でも連絡はとらなこと」

次の作戦が立てられません。と主張する。

「わかった、じゃあ、別で動くか

「そうですね」

一手に分かれることにした。

「おれたちはこの会議堂を張るから、お前たちは仲間と連絡をとれまさよしは言つた。

不吉な予感がしていた。魔道力を集めたら、集められた人間はどうなってしまうのか。そんな考えが頭をよぎる。まさよしは頭を振

つた。

「とりあえず俺たちができる最善にことをするしかないな」
SOLHAとまきよしは中央へ、アサヒとキラはアジトへ向かうことにする。

祭りが来るのは、ここ。その祭りの間に事件は起られるといふことだつた。

「祭りか」

まさよしが呟く。

「雨だ、まさよしへん」

「やうだな」

ぱつ、ぱつと雨が降り始めた。すぐに本降りになる。屋台の屋根を探し、そこに飛び込む。

「みゅ」

ぽみゅははだしの足が泥だらけだ。かといって本体に戻るつもりもないらしく、少女のままだ。何も感情を写さない目がまさよしをじっと見る。

「ぽみゅ、汚れちゃったね」

とSOLAが云つ。

雨の中。男たち、女たちがめいめい着飾つて出でてくる。

中央の祭りが始まると、食事の席で男たちがしゃべつていたことを思い出す。仮装力一二バルだ。

仮装した者たちの顔はわからない。

熱気と狂気が混じりあう祭りだ。

雨が必ず降るのだそうだ、この祭りの日には。そして雨の中ぐしやぐしやになつて踊りまくるのが祭りなのだそうだ。

まさよしはため息をついた。雨が激しくなつてくる。あちこちのドアから原色の人間なのかそうでないのかわからない人間たち。

「何か来るような気がする」

SOLAが頭上を見る。雲の塊がものすごい勢いでこちらに向かっているのが見えた。

「あれは、雲ではないよまあよしきん
SOLOAがそう言つた。

「ドラゴンが来る」

と誰かが云つ。

「ドラゴン」

祭りを見に来るドラゴンがいるのだとそこには聞いたことがある。でもそれはただの伝説のはずだ。

「ドラゴンだ、ドラゴンだ」

雲をまとった何かが勢いよく現れる。

「見える」

SOLOAが言つ。

「見えるんだ、この町がクリアに失われるところが
そんなことはさせない」

まさよしは言う。

この街が死んでしまったら街に野菜を供給している村もやられてしまつ。そう思った。利己的な理由だが、大義名分を振りかざして人を殺すよりよほど健全だ。と自分では思う。戦争がなんだというのだ、そんなものただの人殺しではないか。

「僕たちでなんとかできるものじゃないかもしれない」

SOLOAが呟く。

「あれは、僕の博士を作っていたものだ」

「なんだって」

「情報として僕にインプットされている。まさよし、僕は僕じゃなくなるのはいやだ」

「SOLOA？」

「う~」

と頭をかかえる。頭をふると、何か唱え始める。

「SOLOA」

「大丈夫、今情報をうまく引き出してるから
まさよしはSOLOAの冷静な声にうなづく」

「できた」

まさよしぐん、なんか書くもの持つてる? といふSO-LAが聞く。
まさよしがペンを出して、紙を出す。

SO-LAがものすごい勢いで図と文章を書きだす。

「設計図」

「なんだ」

「あれに敵対するもの」

「作れるのか」

「作れる。呪文の詠唱が長いけど、やりきるから、ちょっと広い場所が必要なんだけど」

と言いつつ走り出す。まさよしも走る。
雨が顔に当たり、口に入る。

「ここなら」

通行止めされた広場があつた。警備の人間が数人いたが、SO-LAが放電の呪文で全員を眠らせる。

「行くよ」

「ああ」

広場で、詠唱が始まった。

光が、広場に広がり、円陣ができる。

かちやかちやと音をたてながら円陣の真ん中に何かがうごめき始める。浮かんできた機械がの真ん中に、砲台のようなものがせり出していく。

詠唱が止まつた。

「我が祈りの産物よ、今こそ目覚めよ
白い光が砲台から解き放たれる。

「行け!」

SO-LAが叫ぶ。

空に向かつて光の弾が飛んでいく。ぶつかつた。雲が晴れる。

「ドラゴン」

まさよしが絶望的な声をあげた。ドラゴンとしか言によつのない

ものが空を飛んでいた。その首に当たる。

「あれが兵器？」

「やうだよ、まさよしくん、ここを滅ぼすためのね」

ドラゴンは攻撃を受けたために、こちらに来る。
アサヒとキラが数人の男を連れて戻つてくる。

「間に合つたか」

「ああ」

ドラゴンは、広場に降り立つた。

いつもなら市場がひらかれているだだつ広い場所だ。祭りで閉鎖
されていたため、人はいない。

ドラゴンだ、しかし、あちこちからコードが伸びていて、人工物
のようでもある。

「こじつが城を囲んでいるんだ」

「城に行かせないようにしなきや」

SOLAがもう一度、呪文を唱え始める。まさよしはまだドラゴンの
コードをめがけ、突進した。引っ張ると、まさよしを放り出そうと
ぶん、と腕をふるわれた。しがみつき、殴る。ぐにゅりと皮にこぶ
しが突き刺さると、くこんだとこるから悲鳴が聞こえた。

「なんだ？」

まさよしは、腰から下っていたナイフを持って走り出す。切りつ
けると、中からぽろぽろと小さな頭が落ちてきた。

「これは」

まさよしは思わず声をあげた。

SOLAがもう一発光を放射する。今度はドラゴンの頭に当たつ
た。

頭が、口々に呪文を唱えだす。

シールド、と誰かがバリアを張つた。それに向かい、呪文がさく
裂し、消滅する。呪文を唱えた頭は動かなくなる。

「気持ち悪い」

「ああ」

精神的に気持ちがいい風景ではない。

「母さん」

「人が声をあげた。

顔のひとつが身内だつたらしい。

「ひどいことをする」

まさよしが咳く。

「攻撃できない」

と誰かが言う。

しかし、攻撃しなければ食い止めるることもできない。

まさよしが、呪文を唱え、自分の筋力を強化する。走り出す。いつまでもSOLAの声がする。それが外界の言葉を認識する最後。呪文が切れるまで、まさよしは相手を攻撃しつづける。頭の中が真っ赤にそまる。攻撃されて吹き飛ばされて、立ち上がり、また駆け出す。意識があるのはそこまでだった。

雨はまだ降り続いている。

「逃げるしかないのか」

「そうだね」

SOLOAが呟つ。

身体の筋肉が修正されていくのが分かる。

「大丈夫」

「ああ」

黒こげの人間だったものがあちこちに転がっていた。肉の焦げたにおいがする。腹が減っている。皿やうな匂いだと思い、気分が悪くなる。生きていてよかつた。

「まさよしくん」

「なんだ」

「街が破壊される前に出よひ、ソロア」

僕の予言が当たるよ。と、SOLOAが呟く。

遠くで落雷の音がした。まさよしは静かに呟く。

「殺戮が始まるんだな」

「うん」

無力だった。

「逃げたくないな」

とまさよしは言った。

「今行つたら犬死だよ」

SOLOAがそう呟く。

「分かつている」

まさよしが答える。

四人とポミニで、歩き出した。祭りの余興だと思つて騒いでいる者たちの間をすり抜け、逃げる。

「できるだけ遠くへ」

逃げていく。街から出て、小高い丘に向かつて走る。光が、夜を貫いた。

「戦いじゃない、虐殺だよ」

「ああ」

「こんな光景見たくなかった」
キラが言つ。

「遅かったのか、俺たちは」
アサヒがそう言い、黙る。

「街がひとつ、壊滅するんだ」
よく目に焼き付けておく。まさよしは、自分の力のなさに呆然と

した。

「何か方法があるはずだ」「
まさよしが言つ。

「次のターゲットは」

「間違いなく首都だ」

「この国の要、魔術で守られた都市」
僕の故郷。とSOLAが呟く。

「行くか」

「うん、でも、作戦が必要だよ僕たちには」
「そうだな」

「先回りしよ」

「僕に考えがある」

「なんだ」

「僕が、まさよしくんに預けたものを使つんだ」
SOLAの言葉に、まさよしは首からわざといる袋を服から取り

出した。

「これが？」

「うん。とにかくセントラルツールまで行つ」
話はそれからだから。とSOLAが言つ。

「なにか策があるのか」

アサヒが聞く。

「うん、たぶん、今は僕にしかできない」とある
とSOLAが答えた。

「お前の言つ」とは大概正しいからな、信じる
まさよじな言つ。

「うそ、信じて」

「じゃあ行きましょひ

キラが言つ。

四人は歩き出した。

まさよじは、迷いつたとSOLAに渡されたものをこした。中身は、
四角い鉄の塊のよつなものだった。

「いこうすると」

ぱきんと音がして、ふたがはずれる。なから一枚のカードが出て来る。

「僕専用のカード」

と言いつつ口元に笑つた。

「まさよじくん

「なんだ」

「僕が何をしても止めないでね」

「ああ

まさよじはそう答えるながら、SOLAが渡していくものを受け取る。

「ケース、持つて」

「ああ

透明なドームを通して、中心に出る。人々の口から、都市がひとつ滅ぼされた話が出ている。

SOLAの歩みになんの躊躇もない。

中心に来ると、誰もいなかつた。

歩く。

「「」」はね

「ああ」

「「」」のカードを持った人間しか基本的に入れないんだ」

言いながら、カードをせまい隙間に挟む。光が包みこんだ。「サテス、イクスリクス」

小さく単語をいくつか呟く。

「古代語か」

「うん、早く、五分間、誰でもはいれるようにしたから」走る。全速力だ。

「「」」までは入れば大丈夫」

SOLOAがけろりとして言つ。

「お前疲れるとか」

「ないよ、設定されてないもん」

「設定つて」

「極限までは動けるようになつてるんだ、でも、あるときふつんと動けなくなる。まさよしくんも知つてるでしょ」「

「知つてるが」

森でいきなり倒れた時、なにをしてやればいいか分からず、困つたのだ。

「僕がここで倒れたら、放つて逃げてもいいよ」

「そんなわけにいかない」

ありがとうとSOLOAが言つて薄く笑う。

「まさかここに帰つてくるなんてね」

歩き始める。

懐かしそうに、並んだ柱の間を通り、扉に出た。

「「」」は

「「」」は中心だよ

誰もいない。

「昔はここに兵士が立っていたんだ」

魔法政令都市の、一番大事な拠点だったところ。

「今はだれもいなはず」

一步中に入ると、光がしたから吹き上げてくる風とともに田をくらませた。

「ここは？」

「魔方陣のある部屋だよ」

「ここには魔力が詰まってるね」

キラが言つ。

「ユータムの五つある拠点のひとつ」

まさよしくん。知つてる？

「噂は聞いてるが」

ユータムの五つの完全魔方陣ですか。キラが言つ。

「そう、僕はこの魔方陣を守るために作られたホムンクロス」でも、僕は完全にはなれなかつた。

「たくさん人がいたんだ、昔は」

「そうなの」

「うん、でももういない」

呴くと、中に入る。

「これは？」

タペストリーがあつた。光つている。

「これは、五つの魔方陣の作動が分かる装置なんだ」

「ひとつ消えてる」

「そう、今、襲撃が始まつたんだ」

「そんな」

「ここも襲撃されると思つから、それを迎え撃つ」

そのために、僕はこの装置の魔力をすべて使う。と、呴く。

「まさよしくん」

「なんだ」

「パブで今度タラ「スパゲティおじいさん」よ」

「ああ」

「じゃあ、僕はこれから魔術の練成に入る」

言いながら手を前に出す。

「キラ」

「はー」

「アサヒさんと一緒に前衛を頼みます」

俺は物理的な力には強いから、肉弾戦に入る。とまさよしが言つ。

「ここので止めななきや」

SO-LAが呟く。

そうだな。とまさよしが言つ。

「じゃ、構えて。すぐ来るよ」

SO-LAがそう言い、血の手袋に描かれた魔方陣に手をかざす。

「コータムの五方陣」

呟く。

「これを壊すといつ」とは

「ああ」

「この国の転覆がかかつてゐる」

「ゴウ」と、音がした。

身構える。

「最終兵器」

起動、と小さくSO-LAが言つ。まさよしはその言葉にじっくりとふるえたが、何も言わなかつた。最終兵器。かつてこの国にあったという兵器のことだ。

コータムの五方陣の下にひとつずつ埋められてゐるんだよね。くしくん。と、SO-LAが呟く。

なにをして止めないでくれと言わたることを思い出し、まさよしは集中する。

突風とともにドアがひらいた。

一人の少年と、大きな獣がドアを壊しながら入ってきた。

「お前たちはだれだ」

少年が言つ。

「お前と敵になる者だ」

まあよしは言つ。

「そうか、では殺す」

「殺されないよ」

SOLOAがそつ言つと右手を差し出す。

それが兵器か、とまあよしは言つ。SOLOAの腕に、機械が絡みついていた。

「いけ」

白い光がほとばしり、獣を貫き、ドアに穴をあける。

獣は自分になにが起きたか分からぬ間に殺されてしまつた。

少年はこちらを見て、何が起きたか分かつたようだ。

「何者だ」

「まさよしくんと愉快な仲間たち」

SOLOAが、真面目にそつ答える。

「まさよし？」

「俺の名前だ」

今日は強化呪文を唱えられない。魔力を身体に感じないからだ。使い切つたのである。

少年が身構える。
まさよしが走る。

「遅い」

動きを見きり、腹を一発なぐる。少年は血をはく。

アサヒが銃をつきつけた。

「殺すのは待つて」

SOLOAが言つ。

「殺せ」

少年が言つ。

キラが黙つてゐる。アサヒも黙つたままだ。

「聞きたいことがある」

「なんだ」

「ほかの場所でも同じような攻撃をしているが、大本はなんだ?」

まさよしが言つ。敵が分からぬ状態で動くのは危険だ。

「そんなことは僕は知らない」

少年はそう言つ。

「知らないか」

まさよしはしばらく考える。

「ただ殺せるつて聞いてきた」

と答える。殺せ。と少年は言つ。

「僕は死ぬか殺すしかないんだ」

「君は、」

「なんだ」

「ホムンクルス？」

「そうだ」

なぜ分かる、と少年が聞く。

「波長が僕に似てるから」

SOLAがそういうと、腰に手をあてた。

「自我があるんだ」

「自我？」

「本当に死にたい？」

「そんなこと聞かれたことがない」

「死にたいかどうかは自分で決めていいんだよ」

「何も知らないくせに」

「そうだね」

SOLAは笑う。

「僕は自分が何もしらないということを知つてゐる」

まさよしがため息をつく。

「こいつお前と同類なのか」

「うん、同類つていうか、後継種？」

「そうか」

「人間じゃないよ」

「SOLAつて人間じゃなかつたの」

キラが言つ。

「うん」

まあ基本的な成分とかは似てるみたいなんだけどねー。と笑いつつ、右手をかまえる。

「ちょっと君の魔力をもらうよ、後で回復するから大丈夫、でもしばらく邪魔はできないようにするね」

「な」

「痛くないから大丈夫！」

光が右手から迸り、少年を包んだ。少年ががくりとひざを落とす。

「ど、いうわけで戦闘不能！」

明るい声にまさよしがふうと息をつく。

「この調子で次のところに行くよ」

「大丈夫か」

「なにが」

「お前の魔法力が尋常でないのは知ってるが」

「大丈夫大丈夫、僕のキャパシティは、海くらい大きいよ！」

なんだか、ちょっとハイテンションなのが余計に気になるが、気にしないことにする。

「外にもいるのか

「分からぬけど、でも大丈夫だと思つ

僕がまさよし君の分も戦うから。と咳く。

「死ぬなよ

「大丈夫」

腕をぶんぶん振りまわし、歩き出す。

手を前にかざすとドアの周りの壁を焼き切り、外に出る。

「細かいザコはまさよしくんたちに任せせるね」

「おう」

外に出ると、空が赤く染まっていた。火の色だ。

「燃えてる」

「ああ」

キラとアサヒがそう呟く。

めまいがする。吐き気も。なんだ、と思ひ。

「大丈夫」

「ああ、大丈夫だ」

強い呪文を使つたあの副作用だらう。魔力を使うと人はどんどんむしばまれると言う。魔法使いがこの世界で忌み嫌われるのはそのせいだ。しかし魔法を使う人間はあとをたたず、それなくしては生きていけない者も存在する。

「暑い」

「そうだな」

ユータムの呪いか。予言通りなのかもな。まさよしは言う。都市伝説があるのだ、まさよしの住んでいた田舎でも知られている、いつかくる崩壊の時を知らせる前兆としての戦いが。

「行くぞ」

全員が歩きだす。

燃え広がるビルから、人が飛び降りている。地獄絵図がそこにあつた。

「走り抜けるぞ」

「はい」

走る。水をかけている魔道師もいるが、いかんせん火の周りのほうが早い。

「中心部を目指すぞ」

まさよしは火の粉をふりはらいながら走る。全員が、中心まで来ると、あの機械でできたドラゴンが塔にまといつき、おおんと鳴いたのを聞いた。ぞくりとした。下りてくる。

「僕が前衛！」

「大丈夫か」

「誰に言つてるの！」

笑いながらハイになつてゐるSOLAが手を開く。

「いけー」

ドラゴンの吐きだした光を押し返し、じゅわんと音をたてながら光がドラゴンの頭を覆つた。

光が消えると、頭のないドラゴンがゆっくり崩れ落ちる。

「やつたね」

身体から光が放たれ、四方八方に伸びる。

「まぶしい」

キラが言う。

「壊れていくな」

「うん。、まずは一体目」

「まずは？」

「うん、たぶん、まだいる」

氣配がするよ、すごく大きな、邪悪な氣配がする。と言しながらにこにこ笑う。本当にしつこい。

「壊れてないかお前」

「わかんない」

あはは、と笑う。しかしこいつに頼るしかない。

「大丈夫、大丈夫」

「お前は」

何を考えている？　とまあよしは思つ。

「復讐か」

「うん？」

「いや、なんでもない」

自分を作った者たちを、こいつは復讐したいのではないかとまさよしは時々思う。だが、こいつはそういう自分を殺している。とも思つ。人間でないといつことが恐怖に変わるほど、SOLAを信じていはないわけではない。こいつはこいつで生きているのだ、と思つ。「こまま突破して、あれを目指すよ

「あれ？」

「そう、真ん中に塔があるでしょ、たぶんあそこには降りてくると思う。魔力がたくさん眠ってるんだ」

「なんでそういうことを」

「知ってるんだろうね、情報が脳に刷り込まれてるんだ」

「うん、と答える。

「ね、まさかよしきん」

「なんだ」

「僕、役に立つてる？」

「ああ」

「よかつた」

僕ねえ、役にたたないから捨てるって言わたんだ。と呟く。
「最後に役に立てばって、研究所に入れられるのにも抵抗しなかつたのにね~」

「なんで今こいつしてるんだろう。と呟く。

「人生間違っちゃったのかな」

「そんなに間違つてもないだろ」

「うーん」

僕はけつこう僕を作ってくれた組織に恩返しがしたかったんだけどね~。裏で動いてるでしょ、組織、ねえ。

「キラくん」

「……、気づいていたんですか」

「ま、ね」

「なんの話だ」

「ちょっとね」

「アサヒくんも分かつてやつてるでしょ

「まあな」

「俺だけ知らないことがあるのか」

「まさよしくん、仲間はずれで寂しい?」

「……、話せ」

「うーん、どこから話せばいい?」

「移動しながらSOLAは話を始めた。

「僕がいた研究所では、僕たちホムンクロスを使った魔法実験が行われていたんだ」

そのなかで、僕は生れて、つていうか合成されて作られた。

「そのとき同時に進行してた研究が、合成による魔法兵器の研究なんだ」

僕はその実験を見ている。とSOLAが言う。

「僕らのメカニズムを応用してるんだよ、まさよしへん、いわば彼ら兵器は僕の兄弟なんだ」

と、SOLAが言う。

「悲しい兄弟だけどね」

まあでも、僕は弟たちを殺すよ。

「僕たちは生れてきたりいけなかつたんだ」

そんなことはないと言つてやればいいのか、まさよしほは考える。生きるということを考える時、まさよしひつも分からなくなる。自分がこうして生きていることに意味はあったのかと。そう考える。捨て去られたもの、といふ意味で、まさよしほSOLAと同じだった。

「つて、考えてるときもあるけどね」

とSOLAがつけくわえる。でも生きてるんだ、僕たちは。

「まさよしへん」

「なんだ」

「生きて帰ろ」

うん、生きて帰りたい。と、呟く。

「僕がホムンクルスだと知つてから、予測したはずだね、一人とも。僕は残念ながら洗脳された個体じやないから、君たちの敵じやない」

「洗脳されていない個体」

まさよしは言つ。

「洗脳されるほど優秀じやなかつたつてことだけど」

でも、博士たちは僕のことを見ぐびってたんだ。数値に表れないキャパシティの問題でね。僕はほとんど無刃蔵に魔力を吸収できる。使い切ると倒れるけど。

「無刃蔵」

「そう、僕は体内に魔方陣があるんだ」

それが魔法をため込む空間とつながっている、と言ひと、ひよいと片手をあげた。

「来るよ」

走るよ！ とUOLOAが言つ。まさよしはそれを追う。飛来する翼のあるモンスター。手の甲から現れた刃物の切れ味をためす。

「けつこう切れるな」

大量虐殺にしか使えないと、まさよしが装備しながら一度も使っていない道具だった。空中から刃を取り出し、透明な刃が現れる。ふだんはじつい指の出せる黒い手袋と言つ感じだ。

走りながら両手をふるとこいつものでかいようなのがどんどん落ちる。頭の中で考えるより早く、敵を認識し、切る。それも急所を。

「早い」

キラが言つ。魔術を使うのはセーブしているようだ、後方で細かな敵を殺している。

「さてと、僕の力を試すときが来たかな」

試さないほうがしあわせだつたんだろうナゾナーと呟きながら両手を前に出した。

白い光が周りを包む。

「キル！」

と叫ぶとあちこちでぶしゅうという音がした。

光でよくわからなかつたが、光が消えてしまつと、だんだんあたりがみえてきた。焦げくさい匂いが立ち込めている。飛んでいたコウモリ系のモンスターを全部焼き殺したのだ。しかし光は、目には影響がないようでわりとすぐにほつきり見える。

「よし、ザコは死んだ、と」

でもまだ来るなあ。

と呟く。

「ウモリ系のモンスターを周りに囲まれるよつこ、大きなドロゴンが飛行してくるのが見えた。

「あれは」

「あれが僕らの敵」

覚えているよ、君のこと。SOLOAが歌つよつこ呼べ。

「さて、まさよしへん、」

「なんだ」

「作戦がある、んだ」

言葉が壊れ始めている。とまあよしは思つ。たまになることだ。
「たくさん敵を一点に集めるにはおとりがい」

「ああ」

「キラくんとアサヒくんは一人で一組、まあよしへんは西ルート、
僕は東ルートを通る」

「わかった」

「死んじやだめだよ、みんな」

「お前もな」

「うん」

「じゃ、走るよ。と走り出す。

間もなく三つの道に分かれむ。

「じゃ、コーダムの一番高い塔で落ち合つよ」

まさよしは走り出す。腕を振りながら身体にまとわりついてくる
モンスターを切つて切つて切つて切り殺す。

「うおあああああ

呪文を唱えなくとも頭のなかは殺すことでいっぱいになる。呪文
を使うことによる副作用だ。

副作用が起きていることを感じながらしかし意識が少し残つてい
る。真っ赤にそまつた視界が、まさよしを狂わせる。動け、殺せ、
走れ、殺せ。

まさよしが先に着く。

塔にかけのぼる「コード」の化け物のよつたドリゴンを見上げる。
科学と魔法の結合を提唱したコラールド博士の夢だったといつ塔
に。

SOLAが「ウモリの群れを引き連れて走つてくる。

「逃げ足は速いんだもんー」

到着! と叫んで後ろを向いて両手を広げ、白い光があらわれ、
それを投げてモンスターをい消し去る。

「どうにかやるしかないな」

まさよしが呟く。

SOLAがまた前を向き、塔を見上げ、笑う。

「あはははははは」

SOLAの周りのゴミが、彼の周りに舞う。両手を前へとゆっく
り差出し、光を集め。円盤になつた光が彼の手からふわりと浮か
び、頭の上で大きく開いて、急にぎゅんと音を立ててドリゴンに向
かっていく。

刃がドリゴンの皮膚に当たるたびにドリゴンの身体に小さな爆発
が起きる。光はそのたびに小さくなつていく。

最後に田らしいところをつぶした。

ドリゴンがおたけびを上げる。

降りてくる。まさよしが走る。

「時間をかせいで」

「わかった」

パンパンパン。ヒ音がする。アサヒの銃声だ。

「間に合つたなキラ」

「そうだね、アサヒ」

誰もが逃げ出す不穏な空氣の中、まさよしたち以外生きた人はい
ない。

「キラ、魔法は使っちゃだめだ、ここは魔力を吸つから」

SOLAが叫ぶ。

まさよしは死体をよけながらドラゴンから伸びた触手をぶつ切る。何本もの触手が伸びてくる。それをしてよけながらすきを見て触手を切っていく。

SOLAの呪文の詠唱が始まる。
手を胸にあて、歌うよ！」。

昔むかしの力よ

僕に与えよ、その力を

「キールギース、サプラ、エイリア」

古代語らしき言葉を吐き出すと、SOLAは手を大きくひらぐ。
「来い」

手を上に高く掲げて、丸い光の輪ができる。小さいものなら見たことがあるが、こんなにでかいのは初めてだ。

魔力を物理攻撃に変える呪文だと前に聞いたが。

「行け」

ぶん、と光が高く音もなくうがび、ドラゴンの首をしゅぱんと切った。

大量の血液らしき黒い濁流とともに黒い光が流れだした。それが SOLAに向かい収束する。

「SOLA」

「大丈夫、受け入れるだけだから。魔法を」

ふう、満腹。と呟く。ポミュが転がつてくる。

「満腹？」

「うん、別腹なんだ」

「別……」

「とりあえず、このドラゴンさえなんとかなつたなら、あとはしばらく攻撃もないと思うけど」

「ああ」

隣国も同時テロなんだよね、そつちはどうなつたかわかる？

「コータムの中央以外はそんなに被害はなかつたな」

「そうだね」

キラが、何かを取り出す。

「無線が復活したようですね。」

「やうか

「そつちまどりなの?」

キラが聞く。

「うん、うん、わかつた」

テロリストは、国が弱体化してしまつと支配する意味がないと判断して隣国には大した攻撃はしなかつたみたいで、助かりました。

「やうか

「向こうの仲間たちがなんとかしたようです」

「とりあえずの脅威は去つたわけだから、街のセキュリティの強化は、それぞれにやつてもらひこじる、僕たちはここから逃げたほうがいいね」

「そんな気がするな」

「うん」

全員で走り出す。

後ろで、塔が崩れだし、あれよしほその音に一回だけ振り返り、あとは走り去つたのだった。

「お世話になりました」

ふたたびリグラーーの片田舎で、わざやかなお別れ会をした。
SOLは帰つてから熱を出し、寝ている。

「ふにゃあ

「起きてくるな馬鹿」

「だつてお見送りくらうしたいー」

「ふにゃふにゃ言こながら出でました。」

「お世話になりました」

キラが言う。

「何にもしないよー」

SOLAは笑う。食べすぎはよくないねーとだけ言つ。魔法を大量に食らった関係で、身体が不調なのだ。と本人は言つていた。帰つてきてパブで酒を飲んだのが原因ではないかとまさよしは疑つてゐるが、黙つた。タラコスパゲティも大量に食べていたし。

「じゃあ

アサヒが言ひ。

「うん」

お元氣で。と言つと、一人は酒場を出て行つた。
まさよしは、大きく伸びをした。

「さて、と」

「ん?」

「お前は寝てろ」

「うん」

いい天氣だ、洗濯でもするか、とまさよしは思つた。白い毛玉姿のぼみゅがみゅーと鳴いた。

「熱が下がつたら、セイさんのところに行いつよ

「そうだな」

「おとなしく寝る

「そうしろ」

と、田常に戻つていくのだつた。

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。筆者が中途半端なため、公開する場所がなく、眠っていた作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8917u/>

まさよしとSOLA 食あたりになったのは、僕のせいじゃない
2011年7月24日03時39分発行